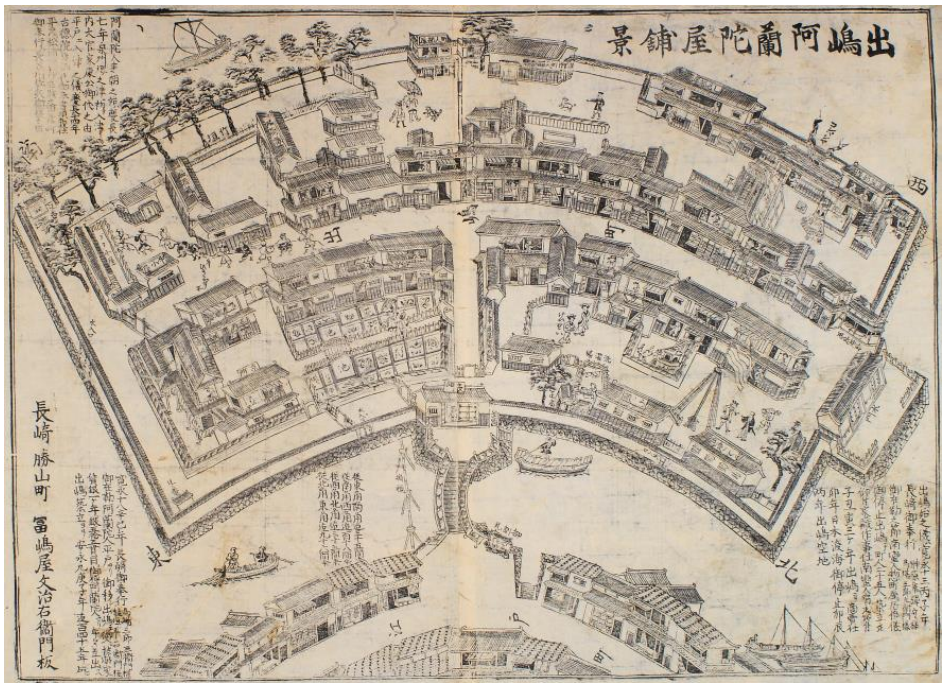
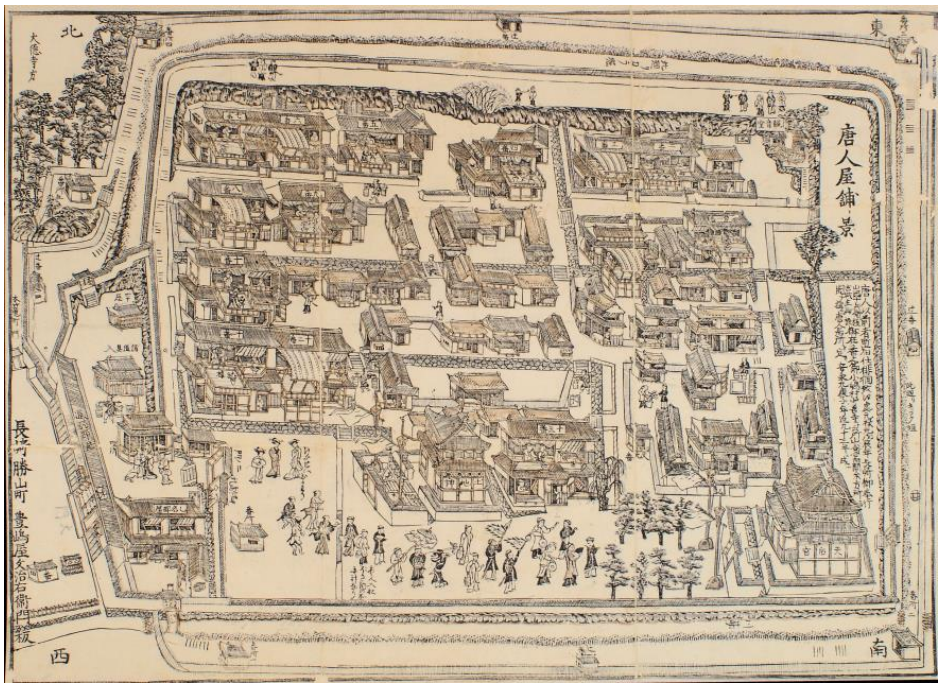
第156回鶴見大学図書館貴重書展

出島と唐人屋敷
―その景観と貿易―





令和4年10月8日(土)～11月5日(土)

鶴見大学図書館1階エントランスホール

貴重書展「出島と唐人屋敷－その景観と貿易－」開催にあたって

いわゆる鎖国体制下において、長崎は海外－オランダ・中国(唐)－に対して公に開かれていた江戸幕府の直轄都市でした。この長崎を舞台として展開したオランダ船貿易と唐船貿易は、物の取引だけでなく人や情報・学問などの交流を生みました。近世日本において長崎は他所にはみられない異国情緒ただよう国際貿易都市でした。オランダ人に対しては出島が、中国人(唐人)に対しては唐人屋敷が居留地としての役割を果たしました。

出島は、本来ポルトガル人を収容するために寛永13年(1636)に築かれた人工の島でした。長崎では元亀2年(1571)の開港以来、ポルトガル人をはじめヨーロッパ人は市内に雑居していましたが、キリスト教の伝播を恐れた江戸幕府は寛永13年(1636)に25人の有力町人に命じて扇形の島を築かせポルトガル人をそこに収容しました。その後、寛永16年(1639)にポルトガル人が追放されると、出島は空き家になりましたが、2年後の寛永18年(1641)に平戸にあったオランダ商館がここに移され、それ以降、安政4年(1857)までヨーロッパに開かれた唯一の貿易窓口としてその機能を果たしました。

唐人屋敷は、元禄2年(1689)に長崎村十善寺郷に造られた唐人を収容するための施設でした。はじめ唐人は貨物を持って自由に知り合いの家に宿泊していましたが、取り締まりや宿口銭の市中配分のため、寛文6年(1666)から各町が順番に1艘宛入港から出船までの一切を取り仕切ることになりました（宿町・付町制)。貞享2年(1685)に貿易額が制限されると、密貿易が頻発しました。そのため十善寺郷の御薬園を他に移して元禄2年(1689)に唐人を収容するために唐人屋敷が造られました。また、唐人の貨物を収納するための施設として、元禄15年(1702)には新地荷物蔵が造成されました。

鶴見大学図書館では、30年以上にわたって近世の長崎貿易をテーマとして古文書・地図・絵図・絵画などを収集してまいりました。展示スペースの関係上、すべて展示することはできませんが、今回「出島と唐人屋敷－その景観と貿易－」と題して収集品の中から厳選し紹介することとしました。また、構成上必要と思われる史料を文化財学科所蔵品によって補いました。解説・参考写真においては長崎市出島復元整備室・長崎市都市計画課・長崎歴史文化博物館・大和市文化振興課より御提供頂きました。各機関に対し感謝申し上げます。

令和4年10月8日

鶴見大学名誉教授
石 田 千 尋

展 示 目 録

※＝文化財学科所蔵

Ⅰ．景観

１．肥州長崎圖　安永7年(1778)　大畠文次右衛門板　1舗　　67.2×90.5cm
２．出嶋阿蘭陀屋舗景　安永9年(1780)　冨嶋屋文治右衛門板　1枚　41.7×56.8cm
３．唐人屋舗景　安永9年(1780)　豊嶋屋文治右衛門板　1枚　43.8×57.5cm
４．〔長崎諸役所絵図〕所収出島図・新地荷物蔵図・唐人屋敷図　安永期（1772～1781）
折本1帖　25.4×10.9cm
５．モンタヌス『オランダ東インド会社日本遣使録』（アムステルダム、1669）
Montanus,Arnoldus. *Gedenkwaerdige Gesantschappen der Oost-Indische Maetschappy in't Vereenigde Nederland aen de Kaisaren van Japan.* Amsterdam,1669.
所収出島図 1枚　30.7×36.8cm
６．長崎唐人屋舗絵圖　幕末期　１舗　37.8×79.4cm
７．ライデン門・マイデン門図　安永期（1772～1781）　1軸　69.3×51.5cm
８．長崎港図　江戸時代後期　文錦堂板　1枚　31.6×45.0cm
９．長崎土産　磯野信春著・画　弘化4年(1847)刊　大和屋板　1巻1冊　23.0×15.7cm
10. 阿蘭陀船圖　江戸時代後期　文錦堂板　1枚　32.3×22.5cm
11. 瓊浦港碇泊之圖　半山直水画　幕末期　1枚　48.8×33.5cm
12-1,2. 清俗紀聞　中川忠英監修　寛政11年(1799)刊　13巻6冊　26.2×18.3cm
13. 開道入寺之図　江戸時代後期　1枚　22.5×30.8cm

Ⅱ. 貿易

Ⅱ-＜1＞オランダ船貿易品

14. 〔辰紅毛船持渡端物切本帳〕　〔天保3年(1832)〕　1冊　13.5×38.6cm
15. 〔反物寄〕〔文化元年(1804)～万延元年(1860)〕　1冊　15.5×22.8cm
16. 丑紅毛船脇荷物一二三四五六七八番部屋見帳〔文化14年(1817)〕　1冊　12.3×17.0cm
17. 物類品隲　平賀源内編著　宝暦13年(1763)刊　松籟館蔵板
    本文4巻・図絵1巻・附録1巻、計6巻6冊　27.0×18.3cm
18. 辰紅毛脇荷物壱番ゟ拾四番部屋見帳　〔文政3年(1820)〕　1冊　12.3×16.5cm
19. 一角纂考　木村兼葭堂著　寛政7年(1795)刊　浪華兼葭堂蔵板　2巻1冊 26.0×18.0cm
20. 丑阿蘭陀船脇荷品代り落札帳　嘉永六丑四番割　嘉永6年(1853) 1冊　12.3×17.3cm
21. 紅毛雑話　森島中良著　天明7年(1787)刊　5巻5冊　22.6×15.7cm
22. 大隅源助引札　江戸時代後期　1枚　33.3×48.1cm

Ⅱ-＜2＞唐船貿易品

23. ※唐方反物切本　文政11年(1828)1月　1冊　26.9×19.2cm
24. 唐方端物寄 従文政七申年至同十二丑年　文政12年(1829)　1冊　9.4×19.7cm
25. 嘉永六年丑壹番割唐方銀札寄　嘉永6年(1853)　1冊　13.3×38.2cm
26. 唐方銀札寄　従嘉永六丑年至安政三辰年　安政3年(1856)　1冊　9.2×18.9cm
27. 六物新志　大槻玄沢訳考　杉田伯元校訂　天明6年(1786)序　浪華兼葭堂蔵板 2巻2冊
    26.1×17.9cm
28. 鮫皮精義　稲葉通龍著　天明5年(1785)　2巻2冊　22.2×15.4cm
29. 装劍奇賞　稲葉通龍著　天明元年(1781)　芝翠館蔵板　7巻7冊　22.8×16.2cm

解　　題

Ⅰ．景観

出島は4,000坪弱の小島で、10名前後のオランダ商館職員とその召使い30名程が居住していた。出島は長崎の町と一つの橋でつながり、橋の手前には制札が掲げられていた。出島にはオランダ人の居住施設や倉庫・通詞部屋などがあり、出入りは大変厳しく制限されていた。

一方、唐人屋敷は10,000坪弱あり、約2,000人収容することができた。周囲は二重の堀と塀で囲まれ、二つ門があり出入りが監視されていた。外出は荷役、唐寺参詣、船の修理などに役人付き添いで許されていたが、幕末には荷物を担いで市中を売り歩く者も多くいた。文化的には卓袱料理や龍踊り、精霊流しなどが市中に伝わった。

ここでは出島と唐人屋敷の景観を江戸時代の長崎の地図や、当時長崎の土産物であった長崎版画、さらに書籍にみられる絵画などを通して紹介する。

１．肥前長崎圖　安永7年(1778)　大畠文次右衛門板　1舗

長崎勝山町大畠文次右衛門板の長崎市街図。大畠文次右衛門は長崎版画の版元豊嶋屋(のちの冨嶋屋）の初代。出島オランダ商館や唐人屋敷・荷物蔵、さらに港内にオランダ船・唐船（ナンキン舟・シャム舟など）を強調して描いていることが、貿易都市長崎の地図の特徴といえよう。本図は山と町家の部分が黄土色に、海と河川は藍色に摺られている。

２．出嶋阿蘭陀屋舗景　安永9年(1780)　冨嶋屋文治右衛門板　1枚

長崎勝山町冨嶋屋文治右衛門板の出島図。当時の出島内の建物の配置が正確に描かれている。冨嶋屋(伝吉)は、はじめ豊嶋屋（二代）と称し、数多くの長崎の異国情緒豊かな題材を選んで板行し人気を得ていた。この図は豊嶋屋として板行された後にもとの板木の「豊」を「冨」にかえてそのまま刷りつづけたものであり、現存するものは非常に少ないといわれている。

３．唐人屋舗景　安永9年(1780)　豊嶋屋文治右衛門板　1枚

展示作品２と対をなす長崎勝山町豊嶋屋文治右衛門板の唐人屋敷図。「土地神」「天后宮」「観音堂」や本部屋の番割など唐人屋敷内部の詳しい様子が描かれている。また、「けいせい出かわり」（丸山遊女の交代）や「唐人入船ぼさ納の所、舟神なり」（天后堂に航海の女神（媽祖）を安置する行列、展示作品12-１、13参照）といった風俗も添えている。

４．〔長崎諸役所絵図〕所収出島図・新地荷物蔵図・唐人屋敷図　安永期（1772～1781）　折本1帖

長崎の主要な建物（役所など）の平面図（32図）を集めた紙本着色の絵図集。東洋文庫所蔵の「肥前長崎明細図」に類似していることより安永期の絵図集と思われる。家屋は黄色、蔵はピンク色、土間は茶色に彩色され、主な建物の間数や名称が記されている。出島（九番）は展示作品２「出嶋阿蘭陀屋舗景」と、唐人屋敷（十一番）は展示作品３「唐人

屋舗景」とその建物の配置がほぼ一致することより、展示作品2、3はこの時期の役所絵図類を原図として俯瞰図にした可能性が考えられる。

５．モンタヌス『オランダ東インド会社日本遣使録』（アムステルダム、1669）

Montanus,Arnoldus. *Gedenkwaerdige Gesantschappen der Oost-Indische Maetschappy in't Vereenigde Nederland aen de Kaisaren van Japan.* Amsterdam,1669.

所収出島図 1枚

著者モンタヌスはオランダの宣教師で日本に来たことはないが､イエズス会士の報告や、オランダ商館長の日記など東インド会社関係の記録などを使用して本書を著した。この出島図は当時の会社関係の資料といわれる。本書はオランダ語版の他にドイツ語版、英語版、フランス語版もあり、当時のヨーロッパ社会に日本の知識を広めるのに役立った。出島図の原題はDe Logie voor NANGASACKI op 't Eylandt Schisma（長崎の手前にある築島（出島の長崎商館））と記され重要施設には符号を付け説明が記されている。建築されてから間もない17世紀中期のもので出島の景観がわかる史料的価値の高い図といえる。

６．長崎唐人屋舗絵圖　幕末期　1舗

幕末期の唐人屋敷を描いた彩色絵図。この図には嘉永2年(1849)に「二ノ門」横に移された「火元番所」が描かれており、展示作品３、４の唐人屋敷図に比べて本部屋が少なく6棟しかない。それに対して聖人堂や元帥堂、綱蔵２棟が出現しており、唐人屋敷図でも最末期のものと考えられる。なお、聖人堂の場所は現在福建会館となっている。本図には、旧蔵者と思われる黒川真頼（1829～1906、国学者）ならびに黒川真道（1866-1925、黒川真頼の四男、教育者）の蔵書印が捺されている。

７．ライデン門・マイデン門図　安永期（1772～1781）　1軸

蘇州版画の影響を強く受けた初期の長崎版画。オランダ船やオランダ国旗が描かれ、LEYDTSE POORT. La Porte de Leyden、MUYDER POORT. LA PORTE DE MUYDEN.（ライデン門・マイデン門）と記すが、風景全体は中国の江南地方を思わせる港町で、蘇州版画のような雰囲気が漂う。版元・制作年代とも明記されていないが、展示作品２「出嶋阿蘭陀屋舗景」や展示作品３「唐人屋舗景」と共通する画風からこれらと同じ安永期の豊嶋屋板とみてよいと思われる。

８．長崎港図　江戸時代後期　文錦堂板　1枚

木版多色摺の浮世絵版画の技法を取り入れた色彩豊かな文錦堂板の長崎港図。画面下方に出島、その左側に新地荷物蔵・唐人屋敷が描かれ、湾内にはオランダ船と唐船が大きく、数多くの使役船が小さく描かれている。長崎領の陸地側から港を俯瞰した典型的な長崎港図。

９．長崎土産　磯野信春著・画　弘化4年(1847)刊　大和屋板　1巻1冊

長崎に関する図録を中心とする地誌。著者の磯野信春は浮世絵師渓斎英泉の門人。本書は諏訪神社・眼鏡橋・大波止などの名勝も記すが、多くは唐館・蘭館・唐寺・唐船・蘭船

などの唐・蘭関係のもので占められている。今回展示した部分は、「蘭館（オランダヤシキ）」の画であり、これは出島のカピタン（商館長）部屋での宴会風景のようであるが、インドネシアから連れてきた召使いや丸山遊女も描かれている。左頁にはヘトル（次席商館長）部屋の屋上にある展望台が描かれ、町年寄の高嶋音全の短歌が添えられている（参考１参照）。

（参考１）　扇嶼夕照　　高嶋音全

夕日さすあふきのしまのたかとのはよそめにさへもまはゆかりけり

10. 阿蘭陀船圖　江戸時代後期　文錦堂板　1枚

船の仕様や主な海外の国々までの距離が図の上段に記されている典型的な木版のオランダ船図。これ以前に描かれたオランダ船図に比べてその規模が縮小されているのが特徴といえる。また、オランダ東インド会社の紋章V.O.C.が逆に描かれているのは、初期の長崎版画のオランダ船図のものを継承している。

11. 瓊浦港碇泊之圖　半山直水画　幕末期　1枚

作者の松川半山（直水は号）（1818～1882）は、江戸時代後期から明治時代にかけての大坂の浮世絵師。菅松峰の門人で風景画を得意とした。本図は、手前に小舟に乗った唐人と積荷を描き、中央に長崎港に停泊中の唐船２艘と小舟を描いている。唐船は、舳（じく）に獅子の面が、艫（とも）に翼を広げた鷲と船名が装飾されている。これら２艘は「鳥船」と呼ばれる福建で開発された唐船。鳥船の名称は、帆の張り出す様子が翼を広げた鳥に見えること、あるいは船体に描かれていた鳥の目玉のようなものに由来するといわれる。画面奥には稲佐山が描かれ唐人屋敷側からみた長崎港（瓊浦港）の風景を描いていることがわかる。

12-1. 清俗紀聞　中川忠英監修　寛政11年(1799)刊　13巻6冊

本書は、長崎奉行の中川忠英が監修者となって中国清朝乾隆時代(1736～1795)ごろの福建・浙江・江蘇地方の風俗慣行文物を長崎に渡来した清国商人から聞き、具体的な絵図をつくって和漢混淆文で解説したものである。ここに紹介した天后廟は、航海の女神天后聖母をまつる廟であるが、長崎の唐人屋敷内にも天后聖母(媽祖（まそ）)を祀る天后堂が設けられていた（参考２参照）。

（参考２）現在の天后堂

13. 開道入寺之図　江戸時代後期　1枚

唐船が長崎に入港すると、船に祀られている天后聖母（媽祖（まそ））を出港まで唐人屋敷の天后堂や唐三ヶ寺（興福寺・福済寺・崇福寺）に移すことになっていた。本図は、その時の様子（菩薩（ぼさ）揚げ）を描いたもので、傘蓋を差し掛けられた人物が媽祖（まそ）と脇侍の順風耳（じゅんぷうじ）・千里眼（せんりがん）を持ち、魔除けの赤い布を結んだ直庫振（てつこふり）がその前を歩いている。銅鑼を鳴らしながら市内を華やかに行列する様子は実見によるものであろう。

12-2. 清俗紀聞　中川忠英監修　寛政11年(1799)刊　13巻6冊

「清俗紀聞」については、展示作品12－1の解説参照。ここでは燈棚（とうほう）・行燈（こうとう）を紹介する。正月十五日の燈籠まつりの際、燈籠のかざり屋台が組まれた（図の上部）。これを燈棚（とうほう）と

いった。また玉にたわむれる竜のさまを演じる竜燈(ロントン)踊り（図の中央）や、張り子の馬を腰につけ、馬を駆って進むさまを演じる馬燈(マートン)踊り（図の左）が通りを練り歩いた。これを行燈(こうとう)といった。長崎市内では毎年春節（旧正月）に合わせて、ランタンフェスティバルが開催され、これらの催し物もおこなわれている（参考３参照）。

（参考３）長崎ランタンフェスティバル

Ⅱ．貿易

オランダ船・唐船が輸入した国際色豊かな品々は、当時の国際的商品流通における日本の位置を明らかにするものであった。オランダ船・唐船の輸入品はそれぞれの通商圏を明らかにするものであり、同時に当時の日本文化・社会・経済に少なからず影響を与えていた。

ここではオランダ船・唐船が輸入した染織品や工芸品・薬品などを、実際の取引史料や引札、江戸時代に刊行された書籍にみられる絵画などを通して紹介する。

Ⅱ-＜1＞オランダ船貿易品

14.〔辰紅毛船持渡端物切本帳〕　〔天保3年(1832)〕　1冊

オランダ船の輸入品は、各種の手続きを経た後、日本側の役人である目利(めきき)によって鑑定・評価され、国内市場にもたらされた。輸入反物に関しては、反物目利と呼ばれる役人によってその職務が果たされた。この反物目利によって輸入反物の裂を貼り込んだ「切本帳」と称する史料が作成され、現在各所に所蔵されているが、これらは、端切れではあるが近世の輸入反物の実物を確認できる貴重な史料といえる。

ここに紹介した史料は、表紙はなくなっているが、東京国立博物館に同じ内容の天保3年(1832)の切本帳があることより、反物目利作成の「〔天保三年　辰紅毛船持渡端物切本帳〕」とみることができる。今回展示した「呉呂服連(ごろふくれん)」は経緯の糸込みが22本前後(1cm間)のかなり均一な平織の起毛のない毛織物。「毛紋天鵝絨」は綿ビロードの一種で、捺染で文様を施したもの。「小羅紗」は経糸２本ごとに緯糸を通した三枚綾織の毛織物。いずれも原産地はヨーロッパ。

15.〔反物寄〕〔文化元年(1804)～万延元年(1860)〕　1冊

本商人（入札商人）が作成した輸入反物の取引結果をまとめた史料（「〔反物寄〕」）。本史料は、天鵝絨や色紙・繪絹類などの文化元年(1804)から万延元年(1860)までの取引結果を記したものであり、展示作品14の内、「紅毛紋天鵝絨」「壱端」が銀「百五十二匁」で本商人「松のや」によって落札されていることがわかる。

16. 丑紅毛船脇荷物一二三四五六七八番部屋見帳〔文化14年(1817)〕　1冊

文化14年(1817)長崎入港のオランダ船が持ち渡った私的貿易品（脇荷物）の取引を本商人（入札商人）が記した取引史料（「見帳」）。本史料には、取引された商品名の横にその商品がスケッチされており輸入品の貴重な絵画資料といえる。一番右の商品「弐番金縁臺

こつふ　五つ」は一つ銀「四十六匁」で本商人「松のや」によって落札されているが、スケッチが添えられていることで、この商品の類例品を伝世品の中にみつけることができる（参考４参照）。

（参考４）「金彩カットガラス杯」（19世紀初期、オランダ）

17. 物類品隲　平賀源内編著　宝暦13年(1763)刊　松籟館蔵板
本文4巻・図絵1巻・附録1巻、計6巻6冊

本書は、宝暦7年(1757)以降、田村元雄・平賀源内・松田長元たちの主催によって開かれた5回の薬品会(物産会)出品物の中から外国産のものを含めて360種を選び解説した著作。「巻之二　石部」において源内は、「ベレインブラーウ」を取り上げ自身の蔵書『紅毛花譜』の彩色や「扁青」（群青）と比較し、この色の同定を試みている。この「ベレインブラーウ」は、18世紀初めにプロシアで発見された化学合成された青色顔料（プルシアンブルー、オランダ名Berlijns blaauwベルレインスブラウ、日本で「紺青」と訳された）で18世紀中葉よりオランダ船が日本に持ち渡り、19世紀前半には日本で浮世絵などに広く普及していた。展示作品11「瓊浦港碇泊之圖」の空や海面に用いられている青色は紺青と思われる。

18. 辰紅毛脇荷物壱番ゟ拾四番部屋見帳　〔文政3年(1820)〕　1冊

文政3年(1820)長崎入港のオランダ船が持ち渡った私的貿易品（脇荷物）の取引を本商人（入札商人）村上が記した取引史料（「見帳」）。本史料には、取引された「紺青　廿三斤五合」の横にベルレインスブラウ（紺青）が塗りつけられている。この商品は、1斤に付き銀112匁6分7厘で本商人「松サキ」が落札している。

19. 一角纂考　木村兼葭堂著　寛政7年(1795)刊　浪華兼葭堂蔵板　2巻1冊

本書は木村兼葭堂が一角について調べ刊行した著作。一角は、ウニコール（unicornis ラテン語）のこと。オランダ側の品名でeenhoornと記され、日本側では「ウニコール」や「ウニコウル」あるいは、ここでいう「一角」と訳された。ウニコールは、クジラ目一角科の水棲動物の歯牙から製した解毒薬で、日蘭貿易においては大変高価な薬品であった。ここに紹介した「一角魚身有鱗圖」はキルヒャーの『地下世界』に、「一角獣圖」はヨンストンの『禽獣蟲魚図説』によっている。

20. 丑阿蘭陀船脇荷品代り落札帳　嘉永六丑四番割　嘉永6年(1853) 1冊

嘉永6年(1853)長崎入港のオランダ船が持ち渡った私的貿易品（脇荷物ならびに品代り物）の取引を本商人（入札商人）村上が記した取引史料（「落札帳」）。本史料から、「品代り物」として「ウニコール　百五斤」が1斤に付き銀1貫35匁で本商人「長ヲカ」によって落札されていることがわかる。

21. 紅毛雑話　森島中良著　天明7年(1787)刊　5巻5冊

本書は、中良の兄桂川甫周が江戸参府(註)のオランダ商館長を宿舎長崎屋に訪ねて質疑応答した事柄や、蘭学者の間で話題になった外国奇聞などを記したものであり、蘭学草創期

における白眉の啓蒙書といわれている。ここに紹介した「ループル」は伝声管、メガフォンのこと。オランダ語でroepは「呼び声」、roeperは「メガフォン」という意味である。ループルは、オランダ船を通して主にもたらされていたと考えられる。文化4年(1807)から翌年にかけて作成された田澤春房の「長崎雑覧」には「マタロス綱階子尓登圖」に船員が1メール余と思われる「ルウプル」を持った図が描かれている（参考５参照)。また、全長164センチメートルのループル（箱書きは「ツウフル」）が現存している（参考６参照)。

（参考５）田澤春房「長崎雑覧」（京都大学附属図書館所蔵）

（参考６）長谷川家所蔵「ツウフル」（ループル）江戸時代後期

（註）江戸参府：オランダ人が通商を免許されていることの御礼のため、将軍に謁見して贈物を献上する行事。

22. 大隅源助引札　江戸時代後期　1枚

大隅源助は幕末から明治中期にかけて、ガラス器などの製造販売をおこなっていた。この引札には、眼鏡や望遠鏡などレンズを使った品物がみられ、裏面には測量器具が多く描かれている（参考７参照)。これらの品々は主にオランダ船によって輸入されたものである。

（参考７）「大隅源助引札」裏面

Ⅱ-＜2＞唐船貿易品

23. ※唐方反物切本　文政11年(1828)1月　1冊

文政10年(1827)に長崎港に入津した唐船2艘〔亥九番船(寧波出港船)・同拾番船(南京出港船)〕の輸入反物の切本帳。この切本帳は「子壱番割」すなわち文政11年の1回目の長崎会所と本商人との取引にかけられた反物類の裂を貼り込んだものである。この切本帳は反物目利によって作成されたものであるが、反物目利作成の切本帳は、主に価格評価のために作成されたものであり、その他、商人荷見せや荷渡し等の際に現物と照合するためのものであったと考えられる。今回展示した「繻子（しゅす）」は中国産の本絹の練糸を使用した本繻子。

24. 唐方端物寄 従文政七申年至同十二丑年　文政12年(1829)　1冊

本商人（入札商人）が作成した唐船が輸入した反物の取引結果をまとめた史料（「端物寄」)。本史料は文政7年(1824)から同12年(1829)までの取引結果を記したものであり、展示作品23の「色繻子」「廿四反」が1反に付き銀「二百目」で本商人「上野や」によって落札されていることがわかる。

25. 嘉永六年丑壹番割唐方銀札寄　嘉永6年(1853)　1冊

この切本帳は「丑壹番割」すなわち嘉永6年(1853)の1回目の長崎会所と本商人との取引にかけられた銀札商売での反物類の裂を貼り込んだものである。今回展示した「尺長皿紗」はヨーロッパ独自の意匠によってアリザリンレッドやクロムイエローのようなあざやかな色彩を用いた花柄のプリント更紗。原産地はヨーロッパ、恐らくイギリス産と考えられる。

26. 唐方銀札寄　従嘉永六丑年至安政三辰年　安政3年(1856)　1冊

本商人（入札商人）が作成した唐船が輸入した銀札商売での反物の取引結果をまとめた史料。本史料は嘉永6年(1853)から安政3年(1856)までの取引結果を記したものであり、展示作品25の「尺長皿紗」の内、「弐番　八拾反」が1反に付き銀「六十五匁七分」で本商人「永井や」に、「三番　四拾五反」が同じく銀「六十八匁」で本商人「野田や」に、「四番　弐百弐拾弐反」が同じく銀「五十六匁」で本商人「村上」に、「五番　拾壱反」が同じく銀「百拾二匁九分」で本商人「永井や」によって落札されていることがわかる。

27. 六物新志　大槻玄沢訳考　杉田伯元校訂　天明6年(1786)序　浪華兼葭堂蔵板 2巻2冊

当時蘭学者の間で関心の高かった、一角(ウニコウル)・洎夫藍(サフラン)・肉豆蔻(ニクズク)・木乃伊(ミイラ)・噎蒲里哥(エブリコ)・人魚の6種の薬物について考証した著作。ここに紹介した肉豆蔻は、日本で搾油または蒸留油をとり、神経痛、健胃、矯臭などの薬剤とされた。唐船だけでなくオランダ船によっても輸入されていた。原産地はモルッカ諸島バンダ。

28. 鮫皮精義　稲葉通龍著　天明5年(1785)　2巻2冊

著者の稲葉通龍は大坂の刀剣装具商。本書は刀剣の柄や鞘に用いられる鮫皮について、刀剣装具を念頭に絵入りで詳しく説明している。当時、鮫皮はさまざまな魚皮の総称であった。オランダ貿易史料で鮫皮はroggevel(-len)(鱏(えい)の皮)といっている。鮫皮にはシャム・カンボジア・コロマンデル産があった。そのため、当時、唐船とオランダ船による輸入競争が展開していた。

29. 装劍奇賞　稲葉通龍著　天明元年(1781)　芝翠館蔵板　7巻7冊

著者は展示作品28「鮫皮精義」同様、稲葉通龍。彫物装具を中心に、刀剣に関する事を記した著書。巻一から五には総論や諸工名譜などが掲載され、巻六・七では、佩物(さげもの)類に使用する皮・印籠・根付・緒〆について絵入りで説明されている。ここでは、輸入革のうち唐船が持ち渡った「南京繪革」を紹介しておく。

参考文献

・長崎市出島史跡整備審議会編『出島図』（中央公論美術出版、1987年）
・大庭脩編著『長崎唐館図集成』（関西大学出版部、2003年）
・京都古典同好会編『古版長崎地図集』（京都古典同好会、1977年）
・神戸市立博物館編『鎖国・長崎貿易の華』（1994年）
・神戸市立博物館編『びいどろ・ぎやまん・ガラス』（2000年）
・神戸市立博物館編『西洋の青』（2007年）
・神戸市立博物館編『ギヤマン展』（2014年）
・たばこと塩の博物館編『長崎絵』（1991年）
・植松有希・印田由貴子（板橋区立美術館）編『長崎版画と異国の面影』（2017年）
・長崎県史編集委員会編『長崎県史』対外交渉編（吉川弘文館、1986年）
・山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』（吉川弘文館、1964年）
・山脇悌二郎『長崎のオランダ商館』（中央公論社、1980年）
・山脇悌二郎『近世日本の医薬文化』（平凡社、1995年）
・山脇悌二郎「スタト・ティール号の積荷－江戸時代後期における出島貿易品の研究－」（『長崎談叢』第49輯、1970年）
・大井昇『長崎絵図帖の世界』（長崎文献社、2018年）
・石田千尋『日蘭貿易の史的研究』（吉川弘文館、2004年）
・石田千尋『日蘭貿易の構造と展開』（吉川弘文館、2009年）
・石田千尋「賃借人のウニコール輸入－日蘭貿易における脇荷物と誂物－」（『比較文化研究』第22号、2020年）
・石田千尋「長谷川家所蔵の「ツウフル」について」（『大和市史研究』第42号、2021年）

・孫伯醇・村松一弥編『清俗紀聞』（平凡社、1966年）
・嘉村国男編『弘化版・長崎土産』（長崎文献社、1966年）
・杉本つとむ解説『紅毛雑話・蘭説弁惑』（八坂書房、1972年）
・杉本つとむ解説『物類品隲』（八坂書房、1972年）
・宗田一解説『六物新志・稿／一角纂考・稿』（恒和出版、1980年）
・菊池俊彦解説『紅毛雑話／蘭畹摘芳』（恒和出版、1980年）

・国史大辞典編集委員会『国史大辞典』全15巻（吉川弘文館、1979～1997年）
・日蘭学会編『洋学史事典』（雄松堂出版、1984年）
・洋学史学会編『洋学史研究事典』（思文閣出版、2021年）

瓊浦港碇泊之圖

船長サ十八間
幅八間半
深サ七間
河蘭陀船
大砲五拾挺
帆数十八片
布矢三十二疋
船組百人余
長崎港碇泊十日目
日本ノ長崎港ニ碇泊
タイワレハ四里、
ロソハ八百、
カホフハ七八〇、
ソセヒタハ八七〇、
ビヤタヒハ三七四〇、
ブルタハ三七四〇、
イヒリヒハ三七三〇、
ホハトリハ三七〇、
ヨラシンハ三七〇、
ヨロヒヤハ三七〇、
凡百角九九ナリ